

大らかに学び合える教室を

石窪 満

ていこうと思っています。

二 基調提案にかえて

分科会の案内パンフレットにも書かれているが、音楽は人が豊かに生きていくために欠かすことのできない文化だ。現在、小学校から高校までの学校教育において、音楽の授業時間数が減らされて久しいが、音楽を通じて子どもの生き生きとした姿をさまざまな実践交流の中で明らかにすることによって、音楽教育の重要性を示していくことが大切ではないだろうか。

子どもの成長発達の面でも音楽が大事な役割を果たし、音楽を通して子どもが成長していくことをさまざまな実践発表の中からいいねいに読み取り、そして、分科会参加者の財産にしていきたいと思う。

私たちの仕事をとりまく状況はますますきびしさを増していると思う。その現実にはひるむことなく、今年も参加者のみなさんと共に、子ども一人ひとりの願い、気持ちをつぶしてしまふ「そろえる」「やらせる」「うたわせる」こととは対極にある、人として豊かな内面を育てあう音楽の授業を求めて、楽しく大らかに学び合っていきたいと思う。

一 はじめに

今年の合同教育研究会における音楽教育分科会を、ここ数年、慢性的になってきているレポーター及び参加者の減少から、盛り上がりを書いてきていることもあり、そこからなんとか抜け出したという思いで迎えた。そんな中でも、今年も事前に報告のあった二本のレポートと当日参加者からのレポートを含めて三本のレポートを中心にして話し合うことができた。

また、昨年と同じように大学生の参加が数多くあり、質問や感想としての発言が活発に出され、また退職者の参加もあり、ある意味で緊張感のある分科会となった。

分科会の運営として、今年から今までの共同研究者陣の中に石窪満を加えていただいている。今までの伝統ある分科会の一員になることにためらいを感じているが、責任を持って遂行し

三 実践報告くレポート発表

今回は、小学校の実践から一本と、中学校の実践が二本出された。以下、提案された順にレポートの内容を一部省略しながら中心部分を引用する形で紹介したい。

(1) 生き生きとのびやかに歌う生徒を育てる

山崎 美幸 (釧路市立共栄中学校)

山崎さんのレポートは、大きくは昨年の報告内容の骨子と同じで、そこに「合唱発表会」の実践を加えた続編ともいえる。かなりの部分で昨年の報告集「北海道の教育」に掲載されているので、ここでは合唱発表会に向けての取り組みを紹介する。

合唱発表会の生徒達をどのようにとらえるか

①合唱発表会の経過

先日、学校祭で「合唱発表会」が行われた。音楽科でも最大の行事である。一時期「三年生は演劇などの取り組みで忙しいから合唱はやめましょう」という、その時の学級担任の意向で無くなった年もあったが、やはり、「一年生から三年生の発達

段階の合唱を聴きたい」「三年生の合唱があれば目標になる」「全員で取り組めるのは合唱だけ」などの理由から三年合唱は復活。(略)

②合唱のスタートは・・・

学級で曲を一曲選曲。音楽科で音取りをして仕上げていく。最後は学級で練習したりやる気を育てて本番にのぞむ。

本来であれば、学級ごとにあった曲を音楽科で選曲した方がよいが、「学級みんなと担任の意識を育てること」というねらいがある。それを音楽科は尊重する。

ところが、悲しいことに担任のプライドか賞ねらいなのかわからないが、生徒の気持ちを尊重せずに勝手に決めてしまうことがある。そんな時は最初の二・三時間は表情が硬く、口も開かない声も出さないと、マイナスな状況からのスタートとなってしまう。「選曲」とは、実は学級経営・仲間作り・担任と生徒の信頼関係ができていなければ、なかなか達成できない難しい課題なのである。

③練習中・・・

音楽の中で、合唱発表会のための合唱を練習する。何時間も続く。ともすると訓練のようになってしまう。指示の中身がなると何度も同じことの繰り返し、慣れたりだらけたり、また注

意したり・・・と音楽からはだんだん遠くなっていくような時間を重ねていく。

そのために音楽科は細心の注意を払う必要がある。

1. 毎時間の課題をはつきりさせる。
2. 「少しでもわからないところがわかるようになる」「ハーモニ―を感じる」時間を多くして、気づきと感動の場面をできるだけ多く作る。
3. 人間関係や学級の実情を把握し、それをカバーするような合唱練習の工夫。
4. 一回目より二回目・・・一回ずつの成果や達成感を感じとり、前進していく実感ができるような練習。

④合唱発表会の生徒達をどのようにとらえるか
 ところで、その学級が本当に歌う学級か歌わない学級かはどこで判断したらよいか。合唱発表会の合唱はどれも素晴らしく甲乙付けがたいが、私のポイントは、「先生歌わないの？つまらない」「もつと歌いたい。あの〇年〇組の歌った曲も教えて」と言っただんどん笑顔で歌おうとする学級。「え〜歌はもういいわあ〜」「卒業する分まで歌っちゃったし」伴奏を弾いてもただピアノの音だけ流れる学級。

気持ち荒れている生徒や授業に対しては、ひるむことはないが、「学級の雰囲気」がよびこんでいたり、「友達関係がぐちゃ

ぐちゃで歌おうとしても良い子ぶって見られるから歌わない」ということがあると、とても一筋縄ではいきそうもなく意欲が失われてしまう。

「合唱発表会」の取り組みは、一つ間違うと「音楽嫌い」「合唱嫌い」な生徒を生み出してしまう。先に述べた「合唱発表会」が終わった後の音楽の授業のうたごえが生き生きと響き渡るような子どもたちを育てたいものである。(以下略)

この後、レポートでは「選曲」で大切にしていること、「渡し方」について触れ、実際の実践例（1教室仲間作り〜SGE・SST・PS 2コーチング 3FEELORの法則）を示し、後段で、

現代の子どもたちは、心を開放させ、自分を表現することができないだけなのだ。恐れている。「みんなと違う」ことを恐れている。「みんなの前で表現すること」を恐れている。「自分が持てない」子どもたち、「自分を大事にできない」子どもたち。それに対して、たった週一時間の出会いの中で勝負をかけるようにするには、よほどの覚悟と準備と教師の力量、音楽性が必要とされるだろう。そして、なにより大切なのはその瞬間の生徒の実態を見抜く目ではないだろうか。どれだけピアノを上手に弾いたとしても、どれだけ声楽的にうまく歌ったとしても、それがよい授業を生み出すことにはならない。かえってじゃま

になったり、子どもたちとの距離を遠ざける原因になってしま
うこともある。(略)

とされている。

具体的な実践例をまじえ、そこから教師はなにを教訓として
学び取るのか、どうあらねばならないかをていねいに報告して
いる。

(2) みどり小での実践

北村 公一(札幌市立みどり小学校)

北村さんのレポート報告は、「みどり小の実践」と題して、
今年一年生を担任して、その実践を軸としながら、過去四年ほ
どの学校行事での音楽の取り組みも関連させながらの報告だっ
た。

なかなか授業が成立しなく、個々の問題とあわせてまとまる
ことの困難さなどをかかえながらも、今年の学習発表会では「さ
るかにばなし」を取り組み、その活動を通して集団を高めよう
と模索する取り組みが語られた。

また、全校合唱、学習発表会、運動会などでは、集団を育て
る中で個を育てるという考えから一連の教材群を示しながら、
その実践の一端が紹介された。また、実際の台本や楽譜、資料

を用意してくれた。(「ちいさいおしる」《マルシャーク作》、「森
は生きている」《林光曲》、「さるかにばなし」《民話》など)

あわせて「一つのこと」(斉藤喜博詩、東矢良英曲)や「ぼ
くらは仲間」(やなせたかし詩、鈴木憲夫曲)など、録音され
た子どもたちの音楽を聴くことができた。

教職最後の年ということでダイナミックな報告になり、やや
視点が散漫になった嫌いはあったが、北村さんが大切にしてく
いたこと、ずっとこだわってきたことが十分に伝わってくる報告
となった。

(3) 自分の思いをうたにのせてー小規模中学校での実践からー

石窪 満(標茶町公立中学校時間講師)

共同研究という立場だが、それとは関係なく一現場の実践者
として報告させてもらった。

レポートはまず、現在、小学校と中学校の両方の授業に入っ
ている経験から、授業で大切にしたいことについて触れている。

小学生と一緒に音楽をしていると、「えっ、どうして!」「な
ぜなんだろう?」と、なんにでも目が向いていく貪欲な知的的好
奇心は、柔軟な感覚と仲良くなって、音楽をどんどん豊かにし
ているように思う。そしてそれが、同時にまたはやがて知識や

技術につながって展開していくだろう。授業ではそんなことを大事にしたい。(略)

二人の中学生と授業をしているが、心と体の成長の段階で、声が思うようにでないとか、若いのが故のものの方があつたりするが、正義感にあふれ前向きに考え、表現しようとする立ち方を大切にしたい。「うたう力」というのは技術的なことではなく、感じたことを音楽にのせて表現しようとするエネルギーかなと二人を見ていて思う。そのことを抜きにしての授業はあり得ない。(略)

レポートは続けて、中学校の実践で、変声期を迎えているB君をめぐっての教師の思いについて触れている。

昨年六月一五日の授業は、今も心に残っている授業の一つだ。「木はふるえる」「年輪」「風が光る」「ふしき」(いずれも木島始詩 工藤吉郎曲)とのびのびとうたいつないで、次にシユーベルトの「ます」をうたった時、B君の歌の音程がびたつと合つたのだ。うたい終わつた時、みんなで拍手をして、続けて「詩人ミューズのお気に入り」をうたう。“わー、すごいすごい!”と心の中で思いながらピアノを弾く。(略)

変声期ということもあり、一年生の時から音程の不安定な時

期がずっと続いた。

でも、彼の表現はそんなことを吹き飛ばしてしまふほどの魅力があり音楽を感じていたので、そのズレはまったく気にならなかつた。そう本当に気にしていなかつたのだ。それがこの時間、音程があつた時、やはり喜んでしまつた。ボクが「これはすごい事件だ!」と言つてしまつたものだから、もう一人のAさんは授業が終わつた後で、「事件だ!事件だ!B君の声が合つた!」と担任の先生たちに興奮して話していた。(略)

ところが二学期末の作文で、B君は次のように書いてきた。

僕は歌うのが苦手だしあんまり好きじゃありません。み



んなが音がずれているといつても、今の完ぺきに合っていたといわれても、まったくわからないからです。だから、歌つてるとき、見えない床を歩いている感じで、ここが正解なのかわからず、とても不安です。でもみんなが音があつてるよといってくると、よくわからないけどうれしいです。

—中略—

歌うのはにがでただけど楽しめるようになりたいな—と
 思います。だから音のこととかを考えなかつたら、歌う
 のは楽しいです。

音楽は楽しんだもの勝ちだと思うので、これらはも
 つと楽しめるようになりたいです。

「声」のことは授業では触れないようにし、いつもB君が表現してくる「音楽」に共感し、一緒につくってきた。(と思つていた。)しかし、あの六月の授業から、つい気が緩んだのか、「声が合ったね!」という言葉を使つてしまつていた。B君もそれを「自覚」していて、喜んでると思ひ込んでいたからだ。しかし、それが違ったのだ。(略)

内面に気づき、言葉かけの難しさをつくづく感じた。いくら子どもに寄り添っていると思つても、自分の側のこうあつてほしいという思いだけで話すと、相手の気持ちが見えなくなつて

しまいかねないという、危うさがつきまといつているようだ。だが、この作文の最後の行に励まされる。

「音楽は楽しんだもの勝ちだと思うので、これからはもつと楽しめるようになりたいです。」の言葉に。そして、「楽しめる音楽」「楽しめる授業」を作ることが、教師の仕事なのだから、その努力を惜しんではいられない。(略)

それにしても、教材の受け入れられ方というのは、実にさまざまだ。当たり前のことだが、三人の音楽の楽しみ方もそれぞれで、気がついたり、感心したりするところもまるで違う。それがまた、その音楽の持つ『思いがけない魅力』に出会うことにもつながる。(略)それぞれの思いを、中学生の今の思いを素直に音楽にのせて表現することを楽しんでいよう。言い換えれば、思いが音楽をつくっているともいえる。(略)

そして、シュベルト歌曲の実践の取り組みを紹介したあと、次のようにレポートを締めくくつた。

歌うことを楽しむということは、もちろん歌うことが大好きということもあるけれど、いろいろな発見や驚き、夢を見たり、出会いがあつたり、そして今を見つめたり、そうやって歌うことを通して、音楽と一緒に自分の思いが広がっていけばいいなと思う。そこを大事にしたい。(略)

四 参加者の発言から

一日目でレポート提案を終え、二日目は討論に集中できた。参加者の大半を占める大学生からは、少人数での実践では、どんなところに苦勞するのか、また、少ない人数では目は届くが、大きな学校でやる時には、楽しんで表現することをどのようにするのかなど、率直な疑問が出された。

それに対して、人数が少なくても多くても、楽しんで表現できる時間を保障することは大切で、例えば、積極的に歌曲（斉唱）に取り組み、表現する喜びを味わい体感すると、合唱曲をやってもよく取り組む。また、教師のあり方については、聴かせるための音楽か、自分たちの音楽として楽しむのか、合唱でそろえることを求めるのかなど、教師がどのような立場に立つかということとは大きな問題でもあるという意見も出された。

教師が何歳になっても、悩みながら常に「これでいいのだろうか？」と問い続け、歩んでいくことが大事ではないか。「歌わされる」から「歌ってみたいな」という授業になればいい。形や発声などを第一にするのではなく、安心して声を出せる教師と子どもの信頼感に包まれた教室で、「こんなふうに歌わせたい」から「一緒に音楽をつくる」という姿勢で音楽することが重要なことではないか。など子どもを中心にすえた意見が活

発に出された。

五 討論の特徴と今後の課題

○レポート数が三本ということから、時間をたっぷり使って発表することができた。その後討論に入ったが、参加者のほとんどが学生（延べ一三名の参加）だったということもあり、論議を深めるといふより、質問に対して答えるというパターンになりがちだった。しかし、その新鮮な質問の中にむしる本質に迫るものがあり、分科会としては引き締まったものがあつた。

○合唱の授業で大切にしていることや、また合唱の声の質のことについても話し合うことができた。

○また、子どもの好奇心や能動的な表現を保障し、個に対しての気配りを重視することの大切さについても話し合われた。

○小規模校の少人数の実践で、一人ひとりの表現、想いを大切にした音楽を、実際の録音された子どもたちの声を聴き、具体的に示され、討論の中心にもなった。

○レポートに掲載されていた曲の中から、シューベルトの「ます」「朝の歌（セレナード）」を参加者で歌い、教室で音楽が手渡されていく様子をリアルに感じる事ができた。

今後の課題として、①各地域からのレポート提出を確保する

ためにも、事前の取り組みをもつと意図的にしなければならいと思われる。②レポート発表の中には、録音した子どもたちの授業の音楽を聴いてもらう提案もあるので、再生機材を常設しておくことが望まれる。③準備するレポート数を、今回足りなくなつたので、三〇部に増やすなどの検討をしてほしい。